



## 人権保育専門講座 8（連続講座）－③



# テーマ『多文化共生保育について考える』

常磐会短期大学 教授 卜田 真一郎さん



人権保育専門講座8は、連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に、開催しています。

4回開催するこの連続講座のうち、3回目まではそれぞれに個別のテーマを取りあげ、「共有」「交流」「発信」という3つのステップで段階的に学びを深める形で研修をすすめています。

- |       |                                       |
|-------|---------------------------------------|
| ステップ1 | 各現場で抱えている課題を『共有』する。                   |
| ステップ2 | お互いの取組を『交流』する。                        |
| ステップ3 | 人権保育推進のため、誰に対して、何を、どのように『発信』するのかを考える。 |

第3回のテーマは、「多文化共生保育について」でした。

多文化社会の進行にともない、在日外国人の人々がおかれている状況も多様化しています。同様に、保育現場における外国につながる子どもやその保護者を取り巻く状況も多様化しています。こうした現状から、今回の講座ではこれからの多文化共生保育について考え合いました。

ゲストスピーカーとして京都造形芸術大学の平野知見さんをお招きし、ご自身の体験や保育実践等も交えながら、多文化共生保育についてお話しいただきました。



## ～平野知見さんのお話から～

### ○自己紹介 マイノリティの体験から

オーストラリアへの留学をきっかけに、多文化共生保育の現場で保育経験を重ねながら、オーストラリアの大学で幼児教育について学びました。私が入学した大学では、日本をはじめアジアからの学生の受け入れは初めてだったので、日本人は学内に私一人だけという状況でした。

あるとき、講義を受けていると、何百人も座っている教室のなかで教員が突然私をさして、「教室から出ていきなさい」と言いました。黒髪にアジア人の容姿をしているのは



私一人だけです。その教員は、私を日本人と知っていて「出ていけ」と言っているのです。しかし、講義を受けないと単位を取得できないし、なにより日本人だというだけで教室を出されることに納得がいかず、私はそのまま講義を受け続けていました。やがてその講義の試験を受けました。努力の甲斐もあって、試験の結果は受講生中トップの成績をとることができました。

その数日後、私は大学から呼び出されました。そしてあろうことか、私の好成績に「カンニングをした」という疑いがかけられたのです。努力の結果をカンニングと疑われ、到底納得のいかない私は、必死に疑いを否定し、納得いかない気持ちを伝えようと思いました。しかし、英語がうまく話せず、その場で思いをすべて伝えることができませんでした。後日、大学内での相談窓口にも行きました。つたない英語でしたが一生懸命説明していると、カウンセリングの担当者からは、「もしあなたがこの大学を卒業したいのであれば、(カンニングしたことを)受け入れなさい」と言われました。こんな理不尽なことを受け入れることなどできるわけもなく、そこでもまた押し問答をしていると、たまたま通りがかったエイドリアンという教員が私の話を聞いてくれました。その後、彼女は私の思いや状況を代弁して大学側に働きかけてくれました。そして、なんとか講義の単位を取得することができました。

留学先での生活では、日本ではあまり意識することのなかった「日本の出身である」ということをいつも意識させられました。「人種差別」に敏感になったのも、この時期でした。



## ○「多文化教育」「多文化保育」とは（「国際理解教育」「異文化理解教育」との関係）

「多文化教育」について考える際には、「国際理解教育」と「異文化理解教育」についても確認する必要があります。

「**国際理解教育**」とは 1950 年代後半から提唱された教育です。国際理解と国際協力のための教育であり、外国語によるコミュニケーション能力を高める実践など、当時は外国のことを理解しようという学習が行われていました。

一方、「国」という枠組のみで他国のことを学ぼうとするだけでは、その国における多様な民族や地域性の違いを見逃してしまい、「〇〇国はこういうところ、〇〇国の人はいこんな人たち」というステレオタイプに偏ってしまうことが懸念されます。そこで、

### 国際理解教育

- \* 1950年代後半から提唱された教育。
  - \* 1951年日本がユネスコに加盟
  - \* 教育目標:「Education for International Understanding and Co-operation」  
国際理解と協力のための教育→文部省(当時)が「**国際理解教育**」と翻訳
- 【内容】
- ▶ **他国理解**学習が中心
  - ▶ 外国語によるコミュニケーション能力の育成

同じ国の中でも、住む人の地域によってさまざまなことがちがってくるということに注目する「異文化理解教育」が注目されていきました。

しかし、他国のことを学ぼうとする「国際理解教育」や、異文化を理解し、文化的背景を尊重しようという「異文化理解教育」の考えは、「既存のものを改革する」という視点までは持ち合わせていませんでした。そうしたなか、アメリカの公民権運動で活躍したジェームズ・A・バンクス (James A. Banks) によって提唱された「多文化教育」は、教育においてマイノリティの人権を保障しようとする改革運動でした。バンクスは「多文化教育」のことを「多様な人種の生徒が平等の教育機会を経験できるようにすることを主要な目標とする教育改革運動」と説明しています。

## 異文化理解教育

- \*「国際理解教育」だと国内における多様な民族や地域性の違いを見逃す傾向
- ステレオタイプな認識
- 国家や国民をひとつの単位とする「他国理解」教育より、そこに住む人々や彼らの文化に注目する「異文化理解」の教育が注目される
- ・帰国生の文化的背景を尊重する

## 多文化教育

- \*自分たちの文化そのものも一つの文化として相対化して見直し、異なった文化と融合することを通して、  
新しい文化や地域社会を創造しようとする教育運動
- \*マジョリティ(多数派)のあり方そのものを見直し**変革**の契機とする
- \*民主的な価値観や信念・文化を越えて機能するために必要な知識、スキル、態度を育てられる支援が必要 (バンクスの議論の要約)

## ○ケーススタディ

オーストラリアで平野さんが体験された事例をもとに、参加者が支援の方法や対応の仕方について考え合いました。

### 《Aちゃん(3歳10カ月)》

- \*トンガ王国出身
- \*言語：トンガ語
- \*髪の毛のことで嫌なことを周りの子どもから言われている
- \*一人で遊ぶことが多い

Aちゃんは、オーストラリアの東にある小さな島国のトンガ王国からきています。トンガ王国から来ている家庭は経済的に貧しいことが多く、Aちゃんの家もそうでした。Aちゃんは髪の毛が縮れていることを周りの子どもたちからかわれ、常に嫌な思いをしていました。そのため毎日ほぼ一人で遊んでいます。3歳10カ月ではありますが、身体は年長さんと同じくらいに大きいです。

もしあなたがAちゃんの担任だったら、どのような支援ができるか考えてみましょう。Aちゃんや周りの子どもたちに向けて、どんなことをしようと考えますか？

## 《意見交流から》

- ◆Aちゃんの母語がクラスに通じにくい状況から、トンガを含めた外国の様子を、絵本の読み聞かせをとおして知り合えるようにしたい。
- ◆トンガ王国について、あいさつや食文化などをほかの子どもたちに伝えてもらい、トンガという国について、クラスで関心をもてるように働きかけたい。
- ◆髪質や肌の色、体型はみんなそれぞれ違って、それは大切な個性だということに気づけるような保育をしていきたい。
- ◆まずは保育士がAちゃんの興味のある遊びを一緒に楽しむことから始めたい。楽しそうに遊んでいる様子をほかの子どもたちに見せて、集まってくることでAちゃんとほかの子どもたちが一緒に遊べるようにしたい。



オーストラリアの保育では、毎朝「show & tell」という、日本で言うところの「1分間スピーチ」のような活動があります。みんなに見てほしいものを家からもってくるなどして、それを見せながら話すという活動です。しかしAちゃんは、みんなの前に立っても、何も話すことができずにいました。周りの子どもたちも、Aちゃんが何か話せるよう励ますのではなく、「どうせAちゃんは何も話さない」とあきらめている様子でした。

Aちゃんが何か話せるようにしたいと思っていた私は担任と相談し、まずはAちゃんの髪の毛のことを子どもたちの前でたくさん褒めました。かわいいうりボンがたくさんついていることを褒めたり、家族の誰がリボンをつけてくれるのかを尋ねたりしながら「show & tell」を進めました。周りの子どもたちは、いつもとちがってAちゃんが褒められていることに驚いている様子で、保育士とAちゃんのやり取りをじっと見ていました。

そして次の日、なんとほかの子どもたちはみんな、Aちゃんと同じように髪にリボンをつけて登園してきたのです。みんながAちゃんのことを認め、うらやましがって髪の毛のリボンを真似てきた日、Aちゃんをはじめて心の底からの笑顔を見せました。右の写真がその日に撮った1枚です。

褒められ、「自分にもできる!」と思えた時の喜びはとても新鮮で、元気が湧き出てくるものです。保育士の一言は、子どもたちにとってとても大きな影響力をもつのだということ、Aちゃんをとおして実感することができました。



## ○日本の多文化化の現状

日本における多文化化は、1990年の出入国管理及び難民認定法（以下 入管法）の改正により、労働のために渡日しやすくなり、在日外国人労働者の数が急激に増えたことが影響しています。それに伴って、保育現場でも外国につながる子どもの数が増えていきました。当時の幼児教育の現場では、「まわりが日本語を使っていれば、外国につながる子どもも自然に日本語を覚える」「ジェスチャーやスキンシップで気持ちは伝え合える」「遊びの機会を多く取り入れれば、言葉や習慣は次第に身につについていく」などと捉えられていました。しかしながら、外国人労働者の滞在の長期化や定住化がすすむなか、さまざまな問題が浮き彫りとなってきました。

たとえば…

保護者が日本語を話せないので、家では母語で会話をしている。しかし子どもは学校をはじめ日本語を使う環境のなかで育っていく。そうしたことから、母語が未習得なうえに日本語もうまく話せない子どもたちがいる。

保護者は日本語が話せないままでも、子どもは学校生活等をとおしてどんどん日本語がわかるようになっていく。精神も発達する思春期を迎えるころ、自分や自分の文化のルーツはどこにあるのか思い悩む子どもたちの姿もみられる。

「子どもとケンカもできなくなっている」と嘆く親の姿がある。親の思いを母語で話しかけても、子どもは何を言われているのかわからないので話を聞こうとしない。わが子とのコミュニケーションがうまくとれないことに不安や悩みを感じている保護者の姿がある。

## ○多文化共生保育をとおして

大学で保育について学ぶ際に、十年ほど前までは「多文化共生保育」というテーマのテキストはほとんど見当たらなかったように思います。しかし最近では、いろいろなところで多文化共生保育について取り上げられ、研究テーマとして取り上げられることも多くなってきました。

わたしはもともと、保育に携わりたいと思い勉強していたのですが、自分がどうがんばっても変えられない「日本人」ということで差別を受けた経験から、理不尽な思いをしている子どもたちの現状を、保育士になろうと学んでいる人たちに伝えたいと思うようになりました。学生が保育士になって、理不尽な差別をなくし、多文化を認め合える保育を創造していけるよう、学生の支援に取り組んでいます。





## 「ええぞ、カルロス」

長澤靖浩：作

はせがわさちこ：絵

※大阪市立総合学習センター  
「はーと&はーと」のHP  
にある「絵本紹介」から読む  
ことができます。

最後に、「ええぞ、カルロス」という絵本を紹介します。大阪市立総合生涯学習センター「はーと&はーと」の絵本コンテストで大賞をとった作品です。外国から転入生がやって来ることが分かったときなどに子どもたちと一緒に読むと、「自分にできることはなんだろう」と考えるきっかけにもなるような絵本です。また、私たちに「多文化に接するとはどういうことなのか」「お互いに尊重し合うとはどのようなことなのか」といった、多文化共生保育を考えるきっかけも与えてくれます。

この絵本を読むと、「違い」に敏感なのは、子どもたちではなくて、私たちおとななのだということを強く感じます。子どもたちは、おとなに影響されることがとても多いですね。たとえば、保育室でおとながある子のことを「〇〇ちゃんは、大きな音を出してドスンドスンと歩くから怪獣みたいだね」と言えば、子どもたちはその子を「怪獣だ」と言い始めるでしょう。それが、いつのまにか「怪獣みたいに乱暴だ」「乱暴だから、何かいやなことを私たちにしてくるにちがいない」という偏見につながってしまう可能性だってあります。「違い」は、「まちがい」ではないということを、おとなである私たちが子どもたちに伝える必要があります。ステレオタイプな意識を子どもたちに植え付けないように、「違い」は「まちがい」ではないということをまずは私たちおとなが認識する必要があるのです。



# 「多文化共生保育」にかかわる次の一步を考えよう！

## ～未来への種まきワーク～

一人ひとりが「発信（次の一步）」としてやってみよう  
と思うことを考え、多文化共生保育の推進にむけた『種』  
をまきました。一人ずつが付箋に自分のできることを書  
き、その小さな『種』（できることを書いた付箋）を  
『畑』（模造紙）に貼って（種まき）いきました。



- その子のこと、その子の保護者のこと、その子の国、生活のことをもっともっと奥深く知っていくことを明日からしていきたい。
- 子どもと一緒にお互いの共通点を見つけて楽しむ！！自分の言葉ですりこんでしまわないように気をつける。
- 日本と外国の「同じ」を探して子どもや親をつないでいく！！
- 「違い」を強調するのではなく、「同じ」を共感しあえるかかわりをする！！
- 子どものありのままの姿をほめる。
- 自分自身が多文化に興味をもつ。知ろうとする。
- いろいろな国の文化や価値観について知る。
- 子どもたちにつながりのある外国の食文化について知る！調べる！
- 脱！「郷に入れば郷にしたがえ」。
- 「違いはまちがい」ではないというところで、これは多文化共生だけにかかわることではないと気づいた。相手をもっと知ろうとしていきたい。
- さまざまな文化を知ること。共通の話題や話し合えることを多く見つけることで、話しやすい雰囲気をつくり、思っていること、困っていることを話し合っていける関係を作っていきたい。
- 違いを認め合う気持ちでみんなが心地よくなる！！
- 笑顔を今まで以上に意識していこう。
- タガログ語を使って、笑顔でどんどんあいさつしていく。
- ポルトガル語の挨拶「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などを覚えて声をかける。
- 保護者の話を聞く。何かを伝えようと思うのではなく、話すことを楽しむ。
- 担任ではないからといって距離をおくのではなく、遠慮せず、子どもにかかわっていく！！
- おとなの価値観を押しつけないように気をつけ、「一緒に楽しい」経験をたくさん子どもにしてもらえよう、保育をしていきたい。



## 【参加者アンケートより】

- 外国にルーツのある子や親の言葉を聞くだけでなく、生活背景を知り、母国のことも勉強していきたいと思いました。
- どのように子どもたちをつなげていくか、保護者とどうつながっていくか改めて考えました。また、自分自身もいろいろな文化・価値観等を知っていきたいと思いました。
- 多文化の領域にジェンダーや障がい者が入ってとらえていくという考え方が、すごくよくわかりました。本当にそうだと思います。いろいろな違いを認め合える、そんな社会にしていきたいと思いました。
- 脱「郷にいつては郷に従え」は、自分が意識して考えていかなければいけない課題だと思いました。外国につながるのある人たちがどう感じているか、立場を置き換えて考えていくようにしたいと思います。
- 外国につながるのある子どもだけでなく、日本の子どもに対しても一人ひとりの思いを認めたり、褒めたりしていくことの大切さを改めて感じた講座でした。
- 「違いはまちがいではない」が印象的でした。これは、同和保育をすすめるうえでも大切なことだと思います。相手の育った地域、くらし、考え方も含めて、もっと知りたいと思いました。
- 「違いに敏感なのはおとな」ということを聞いて、自分自身の言動を見直しながら保育に活かしていきたいと思いました。
- おとな目線の「違い」が子どもにとっても影響を与えていることに改めて気づかされました。おとなの価値観を押しつけないように気をつけていきたいです。
- いろいろ違いはあるかもしれないけど、それを難しい問題にしているのはやっぱり自分の「なにかわからないけど難しい」という意識だと改めて感じました。「違い」だけでなく、「共通」をみつける。目からウロコでとても心に残りました。職場でも伝えたい一言です。

